

時計と窓の話

小川未明

青空文庫

わたしの生まれる前から、このおき時計は、家にあつたので、それだけ、親しみぶかい感じがするのであります。ある日のこと、父が、まだ学生の時分、ゆき来る町の古道具屋に、この時計が、かざつてあつたのを見つけて、いい時計と思い、ほしくてたまらず、とうとう買ったということですよ。

「これは、外国製で、こちらのものでありません。ある公使の方^{かた}が持つて帰^{かえ}りましたが、その方^{かた}が、おなくなりになつて、こんど遺族^{いぞく}は、いなかへお移^{うつ}りなされるので、いろいろの品^{しな}といつしよに出^でたものです。機械^{きかい}は正確^{せいかく}ですし、ごらんのとおり、どこもいたんでいません。」と、そのとき、店の主人^{みせしゅじん}は、いったそ

うでした。

父は、主人のいうことを信じ、ほり出しものをしてと喜んで、

これをだくようにして、自分のへやへ持ち帰りました。

私は、父から聞いた、そんな遠い昔のことを考えながら、いま

自分の本だなにのっている時計をながめていました。外国から、

日本へわたり、人の手から人の手へ、てんととして、使用さ

れてきたので、時計も、だいぶ年をとっていると思ひました。

たとえ、古くなつても、その美しい形は、かわらなかつたので

す。四角形というよりは、いくらか長方形で、金色にめ

つきがしてあり、左右の柱には、ぶどうのつるがからんでいて、

はどのとんでいる浮きぼりがしてあるので、いつ見ても平和な、

しずかな感じかんがするのでした。

私わたしの本ほんだには、教科書きょうかしょや、雑誌ざっしや、参考書さんこうしょなどが、ごつ

ちやにはいつています。壁かべには、カレンダーがかかっているし、

へやのすみには、野球やきゅうのミットが投げ出なだしてあつて、べつにか

ざりというものがなかつたから、この時計とけいだけが、ただ一つ光ひかつ

て、宝たからもの物もののように見えみました。

母ははも、そう思おもつていたようです。しかし、母ははが宝たからもの物ものと思おもつ

たのは、多た少しょうぼくが思おもつたのと、意い味みがちがうかもしれませ

なせなら、父ちちと母ははが、家いえを持もつたはじめのころは、まだいまの大おお

きな柱はしら時どけい計けいもなくて、このおき時どけい計けいただ一つがたよりだつたか

らでした。毎まい朝あさ、父ちちは、この時どけい計けいを見みて出しゅっ勤きんしたし、また

母は、この時計を見て、夕飯のしたくをしたのでした。そして、時計は、休みなく、くるいなく、忠実に、そのつとめをはたしたのです。

けれど、ぼくが生まれて、学校へあがる時分には、いつしか、茶の間の柱へ、大きな時計がかかって、時間ごとに、いい音をたてたり、すべてご用をたすようになっていたので、この金色のおき時計は、忘れられたように、父の書齋で、書だなの上のせられたまま、ほこりをあびていました。

私は、ほこりをあびて、止まっている時計を見るたびに、なんだか、かわいそうに思い、人間のかつて気ままに對して、腹立たしくさえ感じました。

「おとうさん、あのおき時計どけいをもらっても、いいでしょう。」と、
わたしは、たのみました。

なぜか、父ちちは、すぐにやるといわなかったのです。それを無理むりにたのんで、私わたしは時計どけいを自分じぶんのへやへ持もつてきました。その当座とうざのこと、母ははは、そうじをしに、私わたしのへやへはいつてこられると、おき時計どけいをごろんになつて、

「これは、いい時計どけいですから、だいじになさい。」と、いわれたのでした。さも、子こどもが持もつような品しなでないといわれるようでした。

「なにしろ、正しょうちゃんの生うまれる前まえから、家うちにあるのだし、おとうさんが、だいじにしていられただのですからね。それに、この時と

計けいを見みると、平へい和わな感かんじがするでしょう。」と、おかあさんは、いわれました。

「ぼくも、そう思おもうんです。しかし、時じ間かんは、正せい確かくなんですか。
。」と、私わたしは、いいました。

いつか、山やま本もとくんが遊あそびにきて、ラジオを聞ききながら、この時と計けいを見みあげて、

「おや、この時と計けいは、おくれているのだね。」と、いったことがあるからです。

「それは、正せい確かくでしょうよ。おとうさんが、外がい国こく製せいのいい時と計けいだと、いいつもほめていらしたのですから。」

母ははは戦せん時じ中ちゆう、この時と計けいを疎そ開かい先さきへ持もっていつて、こちらへ

帰ると、時計屋へみがきに出したこと、そして、それがなかなか手間どるので、父が再三さいそくにいったことなど、思い出ししました。

「なるほど、いくらい機械でも、長い間には、はがねがすれて、へってしまふだろう。」と、父は、持つて帰った時計をながめて、いっていました。

「どうかнатたのですか。」と、おかあさんが、そのそばへいくと、

「昔の機械は、いたんでも、とりかえができぬから、こわれれば、それまでだということだ。これは機械にかぎらず、なんでもそうだろう。しかし、まだ役にたちそうだから、このままにしておき

ましよう。」と、そのとき、父ちちがいったことを思い出したので、「あちらのものは、こわれると、こちらでは直なおされないといいますから、こまりますね。」と、母ははは、いいました。

このことばを聞くと、ぼくは、外国品がいこくひんだけに、かえって、不安あんきな気がしました。いくら宝物たからもののようにだいいじにしても、時計けいであるかぎり、時間じかんがくるえば、まったく価値かちはなくなると思おもったからです。

ある日ひ、他の学校がっこうと、野球やきゅうの試合しあいをするので、正二時しょうじに、グラウンドへ集あつまる約束やくそくをしました。ぼくは、すこし早はやめにつたつもりなのに、もうみんながきて、ぼくのくるのを待まっていました。

「正二時しょうじといつたのに、君きみがこないから、どうしたのかと思おもっていたよ。」と、一人ひとりが、せめるごとくいいました。

「そのつもりで、きたんだが。」と、私わたしは、どうして、おくれたのか、ふしぎに思おもったのです。

「正しょうちゃんの時計とけいは、やはりおくられているのだ。ラジオのほうが、まちがっているなんて、君きみはおかしなことをいったよ。ちようど、日にっぽん本ほんが世界せかいじゆうでいちばん強つよいと思おもっていたのと、おんなじなんだぜ。」と、山本やまもとくんが、じようだんをいって笑わらいました。それをきいて一同どうが笑わらい出だしました。ぼくは、そういわれると、さすがに、はずかしくなりました。父ちちの自慢じまんした時計とけいが、やはり正せい確かくでなかったのかと思おもったのであります。

家へ帰ると、さつそく、柱時計と、おき時計の時間を見くらべてみました。やはり、十五分ばかりちがっていました。いままで、こんな研究をしなかつたことにも、落ち度がありました。「おとうさん、あのおき時計は、くるっていますね。」と、ぼくは、父にむかつていいました。

「そうか。進むのか、おくれるのか。」と、父は、聞きかえしました。

「外国製の正確な時計とばかり信じて、ラジオのほうをちがっていると思つたのですが、いま見ると、やはり、おくらんでいます。」

そう、ぼくがいうと、父は、笑い出して、

「そんなことをいうと、笑わらわれるよ。標ひょう準じゆん時じにあわせてあるので、ラジオのほうがいつも正ただしいのだ。この時とけい計けいをみぎがきにややつて、長ながくかかつたのも、そんなことだだつたろう。……時とけい計けい屋やでは、下したへ落おとしたことがないかといいつていたから。それでなくとも、長ながい間あいだには機き械かいがすすれて、くるいいがくるので、もう、昔むかしのよように、直なおらないかかもしれない。」

ここう、聞きくと、私わたしのいままでのほよりこと喜よろこびは、たたちままちきええてしまいました。ししかし父ちちはここういいつたけれど、ままだ時とけい計けいにたい対たいして、いいくらか未み練れんを持もつていいるよようででした。

「時じ間かんが正せい確かくでななければ、家か宝ほうでも、なんでもあありませせんね。」

と、ぼぼくががいいうと、父ちちは、

「しかたがない。なんにでも、寿命じゆみようというものが、あるからな。」と、さびしそうに、いいました。

「このごろは、日本にっぽんでも、いい時計とけいができるから、そのうち、新しいあたらのを買ってやる。」と、いつて、さすがに、父ちちは、いつまでも価値かちのないものに、こだわるようすはなかつたのです。

私わたしは、あまり、あきらめのいいのを、かえつてもものたりなくさえ感じかんしました。

「おかあさんも、平和へいわな感じかんのするいい時計とけいだとおっしゃったが、ほんとうにおいしいことですね。」と、父ちちにむかつて、いうと、

「いや、時計とけいは、時間じかんを見るものだ。かざつておく、こつとう品ひんではない。もうちつと、待まつておいで、いいのを買ってやるから。

その前に、おまえのへやを直なおしたいと思おもっているのだ。」と、父ちちが、いいました。

それというのは、ことし三年ねんせい生せいになつた妹いもうとが、まだ自分じぶんのすわる机つくえを持つていないので、いつも茶ちやの間まのちやぶ台だいや、えんがわで、かばんから本ほんを出だして、勉べんきよう強きやうしているのを見みて、母ははは、かわいそうに思おもつて、

「よし子こちゃんにも、一つ机つくえを買かつてやらなければ。」と、いつたことがありました。父ちちも、

「正しやうきち吉きちのいる、四じやうはん畳はん半はんで、二人ふたりが勉べんきよう強きやうするにはすこし暗くらすぎるから、新あたしく窓まどをつけてやりたい。」と、母ははに話はなしているのを聞ききました。

「時計よりか、へやの明るくなるほうがうれしいです。」と、ぼくは、いつて、なぜ早く、妹のことを考えてやらなかつたらうと、自分をはずかしく感じました。

「大工のつごうで、すぐにしてやるよ。」と、父がいいました。おもいがけない二つの喜びが、一時にやってきたよう、私の胸はおどりました。

「こんなに、私たちのことを思ってくださいるのか。」と、心うちで感謝したのです。

東にしか窓がなかつたのを、西にも窓がつくと、同じへやとは信じられないほど、明るくなりました。しかも、その窓からは、これまで見られなかつた森や、電信柱や、遠くの高い煙突

までが、さながら、あぶらえ油絵を見るように目にうつつたのです。このあた新しい風景は、ふうけいぼくの気持ちきもちを、どんなに引ひき立たたせたかし
れません。

「これから、うんと、べんきよう勉強べんきようができるぞ！」

「にいちゃん、ごらんなさい。あんなに雲くもがきれいなこと。」と、
いもうと妹いもうとが、もり森のいたもりただきをさして、呼よびかけました。

「あ、きれいだね。よし子こちゃん、クレオンで、あの雲くもを写しゃ生せい
してごらんよ。」と、こころそらぼくは、心こころが空そらへむかつて、とび立たつ思おもい
がしました。

こうして、いきいきとした自然しぜんを見みると、たとえ、どんな平和へいわ
けしきな景色けしきでも、時計とけいについている動うごかないかざりを、感嘆かんとんして見み

る気がしなかつたのでした。それに、時間が不正確とわかると、そばにおく気はもうなかつたのです。

「こんどは、いい時計が、早くほしいな。」と、ぜいたくと知りながら、妹にむかつて、私は、希望を話したのでした。

この希望も、たちまち達せられたのは、十何年前に、父がおき時計を買った、古道具屋の主人が、有田焼の大きな丸火鉢を、とどけてくれたからでした。

「ご苦労さま。」と、母は、ねぎらいました。

父は、おくから出てきて、

「この時計ですよ、覚えがありませんか。公使の方が持ち帰られたとかいうのですが。」と、主人に見せました。

「そんなことがありましたかな。十年といえ、いや、私だつて、このとおり頭あたまがはげましたから、時計とけいが、いたむのもむりはありません。このごろ、日本製にっぽんせいでいいのができました。このさい、おとりかえなさるほうが、およろしいかもしれません。」と、主しゅ人じんはいいました。

「こんなになつても、買かう人ひとがありますか。」と、父ちちが聞ききました。

「それが、おかしなもので、外国製がいこくせいといふので、買かつていく人ひとがありますから。」と、主しゅ人じんは笑わらいました。

「ただ、かざりにするなら、この時計とけいは、りっぱなもんだ。」と、父ちちも、笑わらいました。

主人しゅじんが時計とけいを持ちもちさつてしまつてから、わずかふつか二日ふつばかりの内に、父ちちは、日本製にっぽんせいの新しい目めざまし時計どけいを買かつてきてくれました。いかにも、はりきつていて、元氣げんきよく、めざまし時計どけいは、シヤン、シヤン、と、ひびきをへやじゆうにたて、黒くろい針はりは、数す字うじの上うえをまことに正確せいかくにさしたのでした。

「このほうが、いいわ。わたし私わたしたちまで元氣げんきになつたようね。」と、妹いもうとが、光ひかつた時計とけいを見み上げて、いったのです。

「そうだね、ぼくたちまで、ぼやぼやするなど、いわれているよ
うだね。」と、私わたしが、いうと、

「やはり、外国製がいこくせい?」と、妹いもうとが聞ききました。

「むろん、日本製にっぽんせいさ。それだから、外国がいこくにまけるな、むだに

時ときをすごされないぞと、いつているじやないか。」と、私わたしは答こたえて、いま日にっ本ぽんが貧びん乏ぼうで苦くるしいのを妹いもうとに説せつ明めいして、昔むかしのよう
にふたたび立たち上あがるのには、ぼくたちが、しっかりしなければ
ならぬのを、教おしえてやりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「小学五年生 4巻6号」

1951（昭和26）年9月

※表題は底本では、「時計《とけい》と窓《まど》の話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

時計と窓の話

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>